

## 南風 こまち

「……ふむ、分かりました。この案件は樽見工業さんにお任せします。今後とも、何卒よろしくお願い致します」  
その言葉を聞いて、私は微笑みと共に軽く安堵の息を漏らした。契約成立だ。

「ありがとうございます。それでは、こちらの契約書の方にサインをお願い致します」

水島くんがそつとタブレットとタッチペンを甘木社長に差し出す。甘木社長は血管の浮いた手でさらさらとサインをして、水島くんに差し出す。

「ありがとうございます。はい、確かに受領致しました」  
その後、数分ほど契約についての申し合わせを済ませた後に商談はお開きとなった。私は水島くんを従えて、意気揚々と外に出る。予定通りに商談が済んだため、帰りの新幹線には問題なく間に合うはずだ。

「プレゼンお疲れ様、水島くん。良かったわよ」

「えへへ、まあ僕にかかればこれくらい、チョイチョイのチョイですよ。あ、もちろん明智先輩のおかげですよ」

水島くんは丸々とした顔をほころばせながら頭を下げる。彼が私の部下として配属されてそろそろ一年になるが、順当に成長している。少しおつちよこちよいなため肝を冷やすこともあるが、どこか憎めない後輩だ。

「せっかく秋田まで来たのなら、どこかで軽く飲んでいきたいですね」

水島くんはどすどすと歩きながらスマホをつつき、私の言葉も待たずに居酒屋を探し始める。

「ほら先輩、この〈かま田〉なんてどうですか？ 秋田駅東口から徒歩3分で、グルメサイトの評価も4.6で高いですよ。値段もお手頃です」

「水島くん、悪いけど居酒屋に寄っている暇は無いのよ、新幹線の席をもう押さえてしまっているし」

後輩はオーバーなりアクションで天を仰いだ。

「え、そんなあ」

「仕方ないじゃないの、別に秋田に出張に来る機会はまだあるから、その時にしましょ」

「ふえ〜い」

水島くんはこれ見よがしにふくれっ面をしたが、まるでフグみたいに膨れて思わず吹きそうになった。彼はいつも表情をコロコロと変えるものだから、いつからか社内では百面相と呼ばれている。

「でも先輩、夕食どうするんですか？」

私は顎に軽く手を当てて考えこむ。歩きながら考えるうちにバス停が近付いてきた。

「そうねえ……秋田駅の駅ナカでお土産を買って、その時に何か買うつもりだけど。サンドイッチくらいあるでしょ」

「サンドイッチい？ ダメですよ先輩、せっかく秋田に来てまでそんな野暮なものを食べて帰るなんて。ここはきりたんぽにしましよきりたんぽ！」

「だからそんな時間は無いって言っているでしょう」

「え……じゃあ、あきたこまち？」

「もしかして生米食えって言ってる？」

「やだなあ、冗談ですよ」

バスが来た。病院を通るコースのためかジジババで席の半分以上が埋まっている。前の方に空席があったから、首尾よくそこを陣取ることができた。

「うーん、でも明智先輩は何か秋田らしいものを食べようとは思わないんですか？ せっかくここまで来て」

「そんなこと考え始めたらきりが無いでしょ」

水島くんは少し変な顔をして考えこんでいたが、やがてパンと手を叩いた。

「そつだ先輩、駅弁買いましたようよ！」

なるほど、その手があったか。

「駅弁ね、悪くないかもしれない。でも何があるのか全然知らないのよね……水島くん、何かおススメある？」

「さあ、何せ秋田は初めてなんです。きりたんぼの駅弁ありますかねえ」

「やけにきりたんぼにこだわっているけど、さすがに無いと思うわよ……」

病院前で乗客の大半が入れ替わる。相変わらず高齢者だらけのバスは市街地を抜け、夕闇が迫る秋田駅のバスターミナルに入っていた。

\*\*\*

土産に地酒と煎餅を買い求め、改札に向かう。

「あ、ほら先輩、あれ」

水島くんが太い指を前方に向けた。改札の右隣に駅弁屋が鎮座していた。入り口前の冷蔵庫に駅弁が平積みされている。

「さあて、何があるかなつと……あ、これなんかいいんじゃないですか？」

水島くんが取り上げたのは赤っぽい包み紙をした駅弁だ。

「鶏めし？」

「ええ、あ、こつちにもある」

そう言うのと、今度は黒っぽい包み紙の弁当を取り上げた。

「こつちも鶏めしですね。値段がちよつとお高めですけど」

「べつやら二種類あるようだ。」

「先輩どつちにします？」

「え？ ど、どつちでもいいけど……」

「じゃあ買ってきますね！」

私の言葉を最後まで聞かずにさつさとレジに並んでしまった。まあいいか。手持無沙汰になった私は列車案内を見上げる。新幹線の時間にはまだ余裕がある。それにしても、(こま)の名前は何を由来にしたのだろうか？

「買ってきました、はいこれ先輩のぶん」

水島くんはせかせかと戻ってきて、私にレジ袋の包みを渡す。……ん？

「何かこれ大きくない？」

「ああ、二つ入っていますからね」

なるほど、私と水島くんのぶんか。

「じゃあお金は車内で渡すから、先に改札入っちゃいましょうか」

「ですね、行きましょう」

先輩は先陣を切って改札を抜けた。私はその肉付きのいい後ろ姿を見て違和感を覚えた。彼もレジ袋の包みを手に提げているのだ。

「水島くん、それは？」

「え？ さつき買った駅弁ですよ」

……ん？

「さつき先輩のぶんも買ったでしょ？ その時に一緒に買いました。あ、他にもバター餅とカップ酒とおつまみと……」

「ちよつと待って、私の袋に駅弁が二つ入っているんだけど、数間違えてない？」

「何言ってるんですか、どつちもって言ったでしょ。明智先輩って意外によく食べるんですね」

「……」

どつちでも、のはずだけど。私は乾いた笑いを浮かべながら、ホームに続く階段を降りた。……余りは明日の昼飯にすればいいか、いやでも消費期限的に厳しいしどうしよう。まあいいか、夜食た夜食。

「ええと、17号車……一番向こうですね」

列車は既にドアを開けて乗客を待っていた。私たちの号車はホームの端っこになるようだ。ホームの先端には家族連れと思しき先客がいた。

「いい、撮るわよ？」

「ほら結、お母さんの方を見て」

きれいな茜色に塗装された先頭部分の真横で赤ちゃんをあやしている父親は、なぜか制服を着ている。

「先輩、ちよつと荷物お願いします」

「え？ ちよつと、どこ行くの！？」

水島くんは私に手荷物を押し付けて家族連れに近寄っていつてしまった。

「撮りましょうか？」

まるで胡散臭いセールスマンのようなノリで母親らしき人に声をかける。スマホを受け取り、そのまま母親も父親と赤ちゃんの横に並べる。

「はい、チーズ」

即席カメラマンはスマホを母親に返却し、小太りな腹を揺すりながら私のところに戻ってきた。

「あのお父さん、たぶんこの列車の運転士ですよ。JRの制服着ていますし」

「へえ、誰にでも家庭があるものなのね」

「にしてもでかいですね、あの運転士さん。まあ腹回りは僕に到底ありませんけどね、わはは」

なにわろてんねん。一人漫才に付き合っていると発車メロディが鳴り始めた。慌てて乗り込むと、新幹線はす

ぐに走り始めた。

\* \* \*

「どういうわけか後ろ向きに走り出した列車の中で、水島くんは待ちきれなかったのか勢いよく駅弁の包みをはがし始める。あろうことか彼も駅弁を二つ買っていた。とんでもない食欲だ。」

「先輩、食べないんですか？」

後輩の姿を見ていると私も急速にお腹が減ってきた。

さて、どっちから食べようか。

「水島くん、今開けているそれってどっち？」

「これですか？ 黒い方ですよ」

私はレジ袋の中から赤い包みの弁当を取り出した。花善・鶏めし。どうやらこれはスタンダードなタイプのようだ。

「赤いのと黒いので何が違うの？」

「さあ？ 開けりや分かりませよ」

開けるまで待ちきれないから聞いてるんでしようが。

まあいいか、空腹の方が先決だ。紐をほどき、包み紙をはがすと透明なプラスチック製の蓋が現れた。

「おお、そつちも美味しそうですね」

水島くんが覗き込む。ご飯とおかずに漬物という典型的な駅弁だけど、そのご飯が名前通り、これ以上ないだろうってくらいに鶏めしだ。

蓋を外し、割りばしを手にする。ぱきりと割ると、竹を割ったようにきれいな真つ二つだ。

「いただきます」

「いただきます」

まずはご飯に箸をつける。秋田の駅弁だから米はあき

たごまちだろう。薄茶色に染まっているのは、ダシかスープかで炊き上げて味付けしたからだろうか。口に運ぶ。わずかにひんやりした米粒はもちもちに炊き上がっている。ダシではなく何かのスープで炊き上げたのだろう、少し甘めであっさりした優しい味わいだ。

「どうです、先輩？ 食文化は旅先の醍醐味ですよ。駅弁は手軽にあちこちの食文化を体験できるのがいいですよね」

列車は夜の中を走る。新幹線を名乗っているのに全然速くない。ずっと地べたを走っているものだから踏切もあるしカーブで揺れる。後ろ向きで物を食べるのは人によつては酔ってしまうかもしれない。

「水島くんは乗り物酔いとか平気なの？」

「え、もうお酒行きますか？ 先輩も好きですねえ」

まるで話が噛み合わないところを見るに、心配するだけ無駄のようだ。レジ袋の中からカップ酒を取り出す後輩を後目に、私はご飯の上に鎮座している鶏肉の煮物に箸をつける。口に運ぶと少し硬めながらもふりふりした食感で、甘辛く煮込まれたそれにご飯が進む。ご飯と合わせるのもちもちの米の中に主張の強い鶏肉の食感がありながらも、味わいは少しアクセント程度にしか変化を起さず、包み込むような味わいを決して邪魔しない。

「はい、先輩」

「え？」

水島くんが隣から蓋を開けたカップ酒を渡してきた。列車の揺れで中身が小刻みに波紋を描きながら揺れている。

「ありがとう。じゃあ、今日もお疲れ様でした！」

「お疲れ様です！」

濃青色のラベルを見ると高清水と書かれている。有名

な秋田の地酒だ。プルタブを引き上げると、ぱきつ、ぽこつと蓋が開く。そつと一口、口に運んでみる。最初はほんのりと甘いのに、喉を通るとスッキリした辛口だ。「さっぱりしてて美味しいですね、これ」

「ええ、ご飯が進むわね」

私は再び駅弁に取り掛かる。鶏めしの上には鶏肉の甘辛煮だけでなくそぼろ卵、そして栗の甘露煮が置かれている。ずつと同じ味わいでは飽きるため、お新香で口直しする。お新香だけで日本酒を飲みたいところだけど、いかんせん弁当のお新香は数が少ない。カップ酒をこれだけで乗り切るのは少し無理がある。

紅葉型に切り抜かれた飾り麩に箸を伸ばす。箸で掴むだけでふわふわした感触が伝わってくる。箸先が緑・白・赤の三色で彩られた麩の中に沈むのだ。

口に運んでみても何の変哲もない麩で、再び鶏めしに箸を伸ばす。麩とはまるで違い、箸先を突き刺すようにしないと取れない。米がみっちり詰まっているのだ。

「先輩、良かったらその鶏肉、僕のと交換しませんか？」

水島くんはそう言つて私の弁当箱に残っている鶏肉の甘辛煮を箸で差した。

「水島くんのは？」

「比内地鶏の塩焼きです。シンプルで美味しいですよ」

「いいわ、じゃあはい、これ」

私は鶏肉の甘辛煮をふたかけくらい水島くんの弁当に渡す。視界に入ったそれは、私が食べている弁当よりも豪華なようだ。肉そぼろが入っていて、おかずの数も多い。

「じゃあ先輩もどうぞ、直箸ですいませんね」

そう言つて、私の目の前に太い腕をねじ込ませながら、

私の鶏めしの上に塩焼きを置く。甘辛煮よりも白っぽい

それに早速箸をつけ、口に運ぶ。

「甘露煮と比べると優しい味って感じではないけど、落ち着いた味ね」

「ですよ。ご飯と合わせても美味しかったですよ」

「そう言われると早速試してみたくなる。口に運ぶと、少し塩味が入るだけでぐつと味が引き締まるような気がした。」

「こつちも捨てがたいわね、二種盛りとかあればいいのに」

「二種盛りが無いなら二つ食うまでです」

「それができるのはあなただけでしょ」

「軽口を叩き合いながら私はまた酒のカップを傾ける。」

一口喉を湿らすと、弁当箱の左上に縮こまるお団子が目についた。口に運んでみると、ふわふわした食感に独特の風味と塩気がする。枝豆団子のようにだ。

列車は最初の駅に到着したようで、デッキから何人か新たな乗客が入ってきた。時計を見ると、既に秋田駅を出てから半時間くらい経過していた。窓の外を見ると大曲とある。

「あ、そうだ先輩。こんなの買ってきたんですよ」

先輩がガサガサとビニール袋の中身を漁り、平べったい包みを取り出した。茶色くしななになった漬物だ。

「これって、いぶりがっこ？」

「ええ。酒の肴にいいかと思つて。先輩もどうですか？」

「もらうわ、気が利くじゃないの」

「いやあ、そんなこと……ありますかねえ。あはは」

「まったく、調子いいんだから」

列車は今度は前向きに走り出した。どうやらこの駅で方向転換をするようだ。

「それにしてもこのお弁当、ちよつとご飯が多いわね」

「そうですね？ これくらいぎつしり詰まっていなくて食べた気がしませんよ」

体育会系の高校生みたいなことを言うが、その突き出たお腹を見れば納得だ。

「そりゃあなたはそうでしょうね」

「先輩、今失礼なこと考えてたでしょう？」

水島くんはわざとらしく頬を膨らませ、一足先にいぶりがっこを口に放り込む。ダイコンやニンジン漬物を燻したものがいぶりがっこで、がっこは秋田の言葉で漬物を指すらしい。袋の隅にそう小さく書かれている。

水島くんの口からバリバリと噛み砕く音がする。かなり歯ごたえがありそうだ。全体的に柔らかめな品が多い弁当の食感にちよつと飽きてきた私も、いぶりがっこに手を伸ばす。

口に入れる前からものすごい癖の強い香りがする。鼻の奥に押し入ってくるこの香りは何に近いのか分からない。でも、決して人工的な粗雑な香りではない。

口に入れると、予想以上の歯ごたえだ。一噛みするごとに歯茎から脳髓を通って頭の中いっぱいポリポリという音が響き、鼻に抜ける香りが強くなる。味わいは濃いが、ほんのりとした甘さもある。

「何だか、秋田のご飯ってみんな優しいのね」

「え？」

「肉！ 油！ ガツツリ！ みたいなんじゃないかって、何かこう、実家に帰ってきてほつとするみたいな、そんな感じの味がする。しない？」

水島くんは二重あごを指でなぞりながら考える。

「言われてみればそうかもしれませんね。米どころなこともありますし、冬場は元々あまり食材が取れるような環境ではなかったでしょうし。だからこそ、なのかも」

どの辺がだからこそ、なのかわからないけど何か納得させられる。少し酔いが回ってきて、細かいところは気にならなくなっているのだろうか。

列車は角館駅に着いた。乗客が二人くらい新たに乗りこる。一人、とても色の白い女性が通路を通った。

「ああいう人が秋田美人なんですかねえ、いいなあ」

「下手するとセクハラよ、それ」

「固いこと言わないでくださいよ、せつかく小野小町の出身地、美人の里に来ているんですから」

私は少し目を瞬かせた。

「小野小町って、あの世界三大美人に数えられる歌人の？」

「ええ」

先輩はナスの田舎味噌を一口で頬張りながら頷く。こまちが走り出す頃に飲み下した。

「小野小町は秋田県出身という言い伝えがあるんですよ。だから秋田ではそれにあやかっつて色々な所に『こまち』の名前を見ることが出来ます」

妙なところで博識な先輩だ。でも、それなら新幹線にまで（こまち）と名付けるのも理解できる。

「ふうん……ふあ、ああ……」

私はそれだけ言つて少しあくびをする。酔いが回ってきたようだ。誤魔化すようにしたいだけの煮しめに箸をつける。繊維の隅々にまで穏やかな味わいのたれが染み込んでいて、全然筋っぽくない。ふつくらとした食感だ。

また日本酒に手を伸ばす。ラベルに隠れてどれくらい飲んだのかはよく分からないけれど、列車がカーブに差し掛かって揺れても中身の動きが見えない。少し酔いが重くなつてきているし、それなりに飲み進めているのだから。

「先輩、いぶりがっこ食べます？」

後輩の声に導かれ、顔を隣のテーブルに向けるといぶりがっこのパックはほぼ空になろうとしていた。いつの間にか？

「もうわ」

どこか病みつきになる食感だ。弁当の中身が全体的にあまりばりつとした食感に恵まれていないからこそそう思えるのかもしれない。でも、弁当の中で固めの食感が楽しめるものって何だろうか……？

酔いが回ってまともでない考え。そんな中、ほろ酔いの段階ならまだ目からの情報は頼りになる。水島くんはさらに新しい包みに手を伸ばしていた。こいつの胃袋は特殊合金か何かなのかもしれない。

「それ何？」

包みの中身は四角く平べったい黄色いケーキみたいなものが六つくらい入っている。

「バター餅です、秋田の銘菓とか」

あきたこまちが取れるような土地だし、餅がお菓子になるのは分かる。でも、なぜバター……？

「僕も初めて食べるんですよこれ、わっ、柔らかい」

太い指でつまむと、ふにやりと形を変え、重力でぶるぶるとたわむのが分かった。そのまま口に放り込まれる。

「うん、先輩の言葉を借りるなら優しい味ってやつですね、これは。焼いて食べてもいいかもしれないです」

身の引き締まったインゲンを食べ終え、私もバター餅に手を伸ばしてみる。指でつまむ。少しひんやりとした感触が指の腹を走ると、赤ちゃんのほっぺたのように柔らかいもちもちが伝わってくる。

「普通のお餅よりずっと柔らかいのね、冷たくなっても全然固くない」

口に運んでみる。すると、芳醇なバターの風味が口の中いっぱいに広がり、続いて控え目な甘さがしつとりと舌を包む。

「わ、柔らかい」

「でっしょー？」

なぜか得意げな表情を見せる水島くんを横目に、私は早速二つ目に手を伸ばした。

「お、どうやら先輩のお気に召したようですね」

「うん、これかなり好きかも。……あ、でも歯にくっつくわねこれ」

「言われてみればそうですね、でもまあほら、そんなその後で歯磨きすればいいだけです」

それもそうだ。結局、バター餅の半分以上を私が平らげてしまった。

「ここまで気に入るならもつと買ってくればよかったですね」

水島くんがけらけらと笑いながら、食べ殻を袋にしましう。でもゴミ箱に捨てに行くことはしなかった。どうやら私が駅弁を食べ終えるのを待っているようだ。

「ちよつと待ってね、すぐ食べ終えるから」

「気にしなくていいですよ、こっちも急かすようでごめんなさい」

水島くんは何だかんだで気配りができる後輩だ。だから、上司や同輩からもけっこう慕われているのだろう。

私も含めて。

「あ、先輩は甘いものはデザートに残すタイプなんですね」

鶏めしを食べ終え、栗の甘露煮だけが残った私の弁当箱を見て後輩が言った。列車は田沢湖を出て、そろそろ盛岡に着こうかというところだ。

「うーん、デザートにするというよりも、甘いものをおかずにするのがあまり好きじゃないのよね。甘いものは好きなんですけど、おかずにするのはちよつと違うというか」

「僕の友達にもそういう人がいますよ。そいつ、かぼちやの煮物を目の敵にしています」

「うーん、私はそこまで過激派ではないかな」

「まあ、そういうのって気分次第ですからね」

水島くんはまたけらけらと笑う。少し顔が赤くなっていると思ったら、私より一足早くカップ酒を飲み干していた。

栗の甘露煮は実に変哲のないものだった。ほっくりとした食感に、砂糖で大幅に増幅された栗の甘さをはじける。

「これを食べると、昔を思い出すのよね」

「昔ですか？」

「うん、栗の甘露煮って瓶詰めになったりしているでしょ？ それがよく家のおやつに出ていたのよ。で、瓶に残ったシロップが本当に甘くておいしくて、小学生の頃だったかな、それをこっそり飲んでるのが親に見つかったって大目玉を食らったのよね。体に悪いからやめなさいって」

「えっへ、ええ……先輩、そんな無茶してたんですか」

「ふふ、弁当やら何やらをいくつも平らげるあなたには言われたくないわね」

楽しい夕食だった。私は割りばしを箱の中に入れ、包み紙やら何やらも全部レジ袋に詰め込む。

「先輩、ついでなのでそれ捨ててきますよ」

「いいの？ 悪いわね」

後輩がよっこらせと立ち上がり、だるまみたいな巨体

はデッキに消えた。隣席からの圧迫感から解放され、一抹の寂しさを覚える。

列車は盛岡に着いた。他の列車と連結するようで、がくんと押し込まれるような揺れと共に景色が止まる。程なくして発車し、水島くんが席に戻ってくる頃には心を入れ替えたかのような爆速を繰り広げていた。

「どうですか、先輩。サンドイッチなんかよりもずっと美味しかったですか？」

「ええ。ありがとうね、水島くん……」

語尾にあくびが混じった。私もカップ酒を飲み干し、列車の小刻みな振動、そして幸せな満腹感が重なり、一気に眠気に引きずり込まれていく。

「また出張先で駅弁か、できれば地元のお店で美味しいものを食べましょうよ、先輩。ね？」

「……うん……」

生返事をして、がくと私の首が窓際に傾く。ぼんやりと眠りに落ちる頭の片隅で、終点に着くまであとどれくらいかかるかをちよっとだけ考えていた。